

# センタージャーナル

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016  
名古屋市中区橘二丁目8番55号  
TEL (052) 323-3686  
FAX (052) 332-0900



水俣病により犠牲となった人々への「祈りの言葉」が刻まれた慰霊碑

(写真の無断転用はご遠慮ください)

立つ！  
いのちの大地に  
聞く！  
いのちの叫びを  
真実の学びから、  
今を生きる「人間」としての  
責任を明らかにし、  
ともにその使命を生きる者となる。

## もくじ

- ・聖典研修 第2回  
『教行信証』撰述の願い 誰に向けて書かれたのか ②・③
- ・大谷派の近現代史  
第31回平和展の開催に向けて ④・⑤
- ・尾張の真宗史  
真宗講集団の葬儀における相互扶助についての補足 ⑥・⑦
- ・INFORMATION ⑧

◆イラストカット集(※寺報などにご利用ください)

## 聲を聞いたか

二月十七日、教務所・教化センター職員研修で水俣の地を訪れた。身を切るような寒さの中、水俣湾の海底に沈殿したメチル水銀を封じ込めるために埋立・造成された地に建つ「水俣病慰霊の碑」を参拝した。碑文には「不知火の海に在るすべての御霊よ 二度とこの悲劇は繰り返しません 安らかにお眠りください」と刻まれていた。

私の生涯において訪れることなどないと思っていた水俣。私が立つ大地の足元には、メチル水銀に汚染された泥土が眠る。おろした足元から「あなたは、今、生きていますか」との声が聞こえてくるような気がした。ふっと、高校からの法友が聞かせてくれた学生祭のテーマである「聲」を憶った。

自分にとって痛い言葉は誰も聞きたくないし、出来ることなら聞かずに過ごしたい。だから私たちの耳はとても臆病になっている、いつの間にか小さくなってしまった。周りの声は大きくなったのに、耳はだんだん小さくなっていく。でもよく耳を澄ませてみて下さい。あなたの小さくなった耳よりも、もっと小さくなった声があることに気付きませんか、微かに聞こえる叫び。そんな微かな心の叫びさえも聞けるような大きな耳を持つた人でありたい。そういう願いを、

雪時雨で体感した寒さとは、外気の寒さでない。日ごろ声なき声に耳を傾けることのない私自身の冷たさであったのだ。我ら人間の営みが共に同心に生きる本願海を迷失し、誰の言葉も聞こうとせず、一人一人が孤立している事実を大悲し、「安らかになど眠っておれない」と、不知火の海がわがわざ、私をこの地に呼んで下さったのである。

この「聲」という字は頭わしていただきます。  
(九州短期大学 学生祭テーマ「聲」 呼びかけ文より)

私の臆病で小さな耳は、泥土に眠るいのちからの「もっと生きたかった」という微かな叫びに耳を塞ぐ。しかしそれでも足元から「二度とこの悲劇を繰り返すことのない安穩な世の中であれ」との聲として伝わってくる。

如来は、難度海に沈淪する私を拯済しようとして不知火の祈りにまでなつて、コンクリートで埋め立てた人知罪業もろともに、手を合わせ念仏申す私に閑かに喚びかけたまう。小さな声小さな叫び、それを聞きとる大きな耳を持って。これこそが人の交わりを深める唯一のものだと教えられた不知火の身悶えの時であった。

(主幹 荒山 淳)

## 聖典研修

2019年9月9日

## 『教行信証』撰述の願い

## 第二回 誰に向けて書かれたのか

講師 一楽真氏（大谷大学教授）



## 感動の書

『教行信証』「総序」には、喜びの言葉、感嘆詞が何度も出てまいります。少し見てもまいりますと「ああ、弘誓の強縁、多生にも値いがたく」（『聖典』一四九頁）という感嘆詞。そして、

ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。

『聖典』一五〇頁

という表現です。このような慶びの言葉が並んでいるのが『教行信証』なのです。

これは一言で申し上げるならば、法然上人を通して、誰の上にも成り立つ真実の仏道に出遇うことができた慶びでしょう。その感動が『教行信証』を選述していく一番の根っこに存在するのであり、そしてそのお心が『教行信証』全体を貫いているのです。

ですから、難しい言葉が見られ、苦手意識を持たれるかもしれませんが、『教行信証』は決して屁理屈を並べ立てたものではありません。親鸞聖人の感動の書物だということを忘れてはいけないと思うのです。

先ほどの文章をもう一度ご覧ください。

そこには「ここに愚禿釈の親鸞」と、ご自身の名前を書かれています。他の著述についても同様のことが言えますが、大事などころに来ると聖人は必ずご自身の名前を出され、「自分においては」ということをおっしゃるのです。「我々は」とか「現代人は」という表現などでばやかしたりはされません。『歎異抄』でも「親鸞におきては」（『聖典』六二七頁）というようにお名前が記してありますから、常日頃から「他の人はいざしらず、この私においては」と、自分の名前をしつかりと押さえた上で語っていかれたのだと考えられます。

もう少し見ていきますと、「西蕃」というのはインドを指しており、「月支」というのは中央アジアです。「東夏」というのはインドから見て東にある中国のことで、「日域」は日本ですね。朝鮮半島は「東夏」という部分に含まれていますから直接的には挙がっていませんが、このような国の違いを超え、生きてはたらいてきた教えに遇えたことを、聖人は「慶ばしいかな」とおっしゃっているのです。

「遇いがたい」ということは、「求め続けたけれども、なかなか出遇えなかった」という人でなければ言えないことでしょ

う。「聞きがたい」ということも、「誰かの話を聞いたけれども、難しい」ということではないのです。この教えに出遇うのにどれだけの道のりを超えてきたのかという、聖人の実感が込められた表現なのです。そして、そのような真実に出遇えた慶びを自分だけに留めず、未来の我々にまで残してくださいと、感動の書が『教行信証』なのです。

そして、自分だけが慶んで終わっていかくものではなく、その慶びを周りの人にも伝えていく。これが教えをいただいた者の大きな責任なのでしょう。そういう意味で、教えをいただいた恩徳にどう応えていくかという、仏弟子としての親鸞聖人の使命を『教行信証』に読んでいくこともできます。『教行信証』の中に出てくる表現で申し上げれば、「知恩報徳」というところに立って、聖人は書いていかれたということです。この点に留意するならば、『教行信証』は、知恩報徳の書であると言えることもできます。

## 聖道門の人々にも

『教行信証』は解説も全く無のまま、**藕か**に**以みれば**、**難思の弘誓は難度**  
**海を度する大船**

『聖典』一四九頁

という言葉から始まります。説明的に考えれば、「阿弥陀仏の誓願は」というような表現から始まった方が、その内容が分かりやすいですね。それをあえて始めにおっしゃらないのが『教行信証』であり、そ

に親鸞聖人の意図が存在すると考えます。

例えば、法然上人の『選択集』は、一代仏教の中に「聖道」と「浄土」があるというところから始まります。しかし「聖道」の教えでは我々は迷いを超えられないのだと、末法という「時」の問題、そして凡夫という「機」の問題を押さえた上で、我々において成り立つ仏道は「浄土」しかないと言われていくわけです。つまり、法然上人は「浄土」を前面に押し立てていくところから始めておられるのですが、当時の仏教界にはこのことをなかなか受け取ってもらえないという状況がありました。

修行してさとりを開こうとする人たちからすれば、念仏一つで助かるというのは簡単すぎるのです。あるいは阿弥陀仏に助けてもらうこと自体、修行を放棄するように見えたのでしょうか。「念仏者は仏教者の風上にも置けない」という思いが、聖道の方々にはあつたと思います。法然上人を通じて真実の教えに出遇えた慶んだ人は、親鸞聖人をはじめとしてたくさんおられたわけですが、その教えを仏教だと認めることができない人もまた、たくさんいたのです。むしろ数で言えば、後者の方が圧倒的な多数派なのです。

現代の私たちでも、実践項目や努力目標を設けて、修行してさとりを開くという仏教の方が分かりやすいでしょう。修行や聞法を続ける中で、階段を一段一段と上がっていくという方が想像しやすい。しかし浄土真宗は、教えを何年聞いたとか、階段を何段上がったかという話では

なく、ともに凡夫として阿弥陀に助けられていくという教えなのです。だからこれが一番聞きにくいわけでしょう。

聖道門の方々から出された念仏への批判や疑問は、自分には関係の無い過去の出来事ではありません。一段一段進歩していくという考え方は私たちの体質みたいなもので、抜けないのです。これは、誰もが一度はくぐらなければならぬ問いだと思ふのです。

親鸞聖人はこのような問題を考え続けておられたのだと思います。聖人は比叡山の修行では助からなかったことをふまえて、「ただ念仏」の教えに出遇われた。ですから、修行をしている人の気持ちも分かるわけです。そのような人たちに対して、始めから「聖道の教えには限界がある」「浄土に入れ」と言ったとしても、受け取ってはもらえないでしょう。例えば、『教行信証』がいきなり「阿弥陀仏の本願は」と始まったならば、薬師如来や大日如来を信仰している人はこの文を見た途端に「自分には関係ないものだ」となるかもしれません。

だからこそ「総序」の冒頭の部分も、私たちに何が与えられているのかということとを非常に端的に語られるだけです。『教行信証』を読んでいるけれど、「難思の弘誓」というのは阿弥陀仏の本願を指しているのだと分かるのですが、最初の時点では直接的に言わないのです。違和感を覚えないうまで私たちをお育てくださり、聞けるようになったところで、じわじわと内容が出てくるような構成になっているの

です。

このことを考えますと、『教行信証』は初めの方を部分的に読んで分かるというものではありません。全部読んでからまた戻るといふ読み方をしなければならぬ書物だと考えます。

### 弾圧した側の人々にも

「後序」の冒頭部分をご覧ください。  
 竊かに以みれば、聖道の諸教は行証  
 久しく廃れ、浄土の真宗は証道いま  
 盛なり。

〔聖典〕三九八頁

「聖道の様々な教えはもはや廃れてしまった故に、その仏道で迷いを超えることはあり得ない。浄土の教えでなければ私たちは助からないのだ」と親鸞聖人は断言しておられます。これがある意味で『教行信証』の結論なのです。しかし、この文章が最初に書いてあったなら、聖道門の修行をしている人は一人も読んでくれないでしょう。

聖人は「私の出遇った仏教こそが本物だ」と自らの手柄のように話したいわけではないのです。聖道の修行をしている人たちにも、「あなた方が求めておられる事柄も、浄土の教えでなければ成り立たない」ということを受け取ってもらいために、結論的な表現を出すことを最後まで引つ張っておられるのです。

ただ、その浄土の教えが「承元の法難」という弾圧によって危機に晒されたことも「後序」には書かれています。「承元丁

の卯の歳、仲春上旬の候」

〔聖典〕三九八頁）に興福寺が訴えてこの処罰が行われたということをわざわざ明記する必要が聖人にはあった。そのくらい『興福寺奏状』は大きな問題なのです。しかし、親鸞聖人はこれによって自分がひどい目に遭ったとは書いておられませんし、興福寺への恨みから書いたというものではないでしょう。この弾圧に関わった天皇の名前も明記しておられますが、その名の前には「諱」（呼ぶことがはばかられるという意）を書きつけています。ですから、対決していくことが目的ではなく、弾圧した人も助かってほしいという思いを聖人は持つておられたのだと思います。

親鸞聖人のお手紙には「弾圧する人をあわれみなさい」という意の表現が何回も出てまいります。

念仏せんひとびとは、かのさまたげをなさんひとをば、あわれみをなし、不便におもつて、念仏をもねんころにもうして、さまたげなさんを、たすけさせたまうべしとこそ、ふるきひとはもうされそうらいしか。

〔聖典〕五七二頁

つまり、弾圧する人はまだ念仏の大事さに出遇っていないということなのです。だからこそ、「先に出遇えた者は、その大事さが伝わるよう念仏申しいきましょう」というところに親鸞聖人は立っておられます。それ故、弾圧者にレッテルを貼って「彼らに念仏を勧めても意味がない」ということはおっしゃらない。聖人ご自身も、法然上人に出遇わなかったら浄土真宗の教えを知

らずに終わっていた。縁次第では弾圧する側に回っていた。そういう思いをもっておられるのでは無いのです。

『興福寺奏状』を読めば見えてくることですが、この弾圧は決して「自分たちが気に入らないから」というような欲望によって引き起こされたものではありません。非常に真面目な人たちが、自分たちの握っている仏教こそが本物だと思えば思うほど、新しく興ってきた「ただ念仏」という教えを許すことができなかつた。そこには「自分たちが正統な仏教徒である」という自負が存在したと考えられます。そして使命感からでしょうか、仏教を守るためにも法然上人の専修念仏、あるいは浄土真宗の教えを断罪し、国の権力を利用して壊していったのです。

一つの答えに縛られて絶対化し、問いが無くなっていく。それはどのような人間においても起こり得ることでしょう。真面目であるが故に起こってくる問題、『教行信証』を見ると、そういう人間の問題が浮き彫りになると思います。

「後序」に記されているのは、恨みつらみや対立ではなく、真実の仏教が見失われるという危機感だと考えます。ですから、『教行信証』には親鸞聖人の「興福寺の人は真と仮を取り違えておられるが、どうか真実の教えに出遇ってほしい」という思いも込められていると考えます。

大谷派の  
近現代史

## 第31回平和展の開催に向けて

研究員 新野和暢いのかずのぶ

はじめに

第31回平和展は、「真宗大谷派の海外侵出―朝鮮開教―」をテーマにして、三月十七日から二十三日まで開催する予定でした。しかしながら、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染者が増加し続けている状況をうけて、一人でも感染者を増やしたくないという想いから延期することとなりました。「平和展」は大谷派の戦争との関わり、とりわけ「非常時」の歴史を通じて、現代に生きる私の課題をあきらかにしようとするもので、毎年、春季彼岸会法要に合わせて開催してきました。感染拡大の「非常時」ゆえ、新たな日程等は未定ですが、内容を先取りしてここに報告します。

## 「朝鮮開教」と真俗二諦

抗日運動の「三・一独立運動」、それに十五年戦争期においても大谷派は、天皇の命令を絶対視しながら、「朝鮮開教」に従事しました。その歴史を、第一部「朝鮮開教のはじまり」、第二部「韓国併合と朝鮮開教」、第三部「十五年戦争と朝鮮開教」という流れで紹介します。(1)

第一部「朝鮮開教のはじまり」では、日本が李氏朝鮮と結んだ「日朝修好条規」を切っ掛けにして始まった「朝鮮開教」の実態に迫ります。その黎明期に活動した人物に奥村円心（一八四三〜一九一三、唐津市・高德寺）がいます(2)。一八七七（明治十）年八月十六日、平野恵粹（一八五五〜一九一四、砺波市・恵念寺）と共に本山から釜山駐留の命を受けた彼は布教拠点を設置し、別院へと昇格させました。彼らの活動は他の日本宗教各派に先駆けたものでした。ソウルや仁川、元山木浦など朝鮮半島に活動拠点を獲得していく主たる場が釜山別院でした。

釜山での布教は、在留邦人に限ったものとするのが通達されていたため、朝鮮人へのアプローチは直接的にはなされなかつたようです。しかし、通度寺や梵魚寺といった釜山近郊の朝鮮仏教寺院などから毎日のように朝鮮人僧侶が訪れたことが、奥村円心の残した日記に記録されています。その日記によりすると、この頃の朝鮮人僧侶との交流は筆談を中心

今回のテーマは、大谷派が朝鮮半島とどのような繋がりを持っていたのかということを中心にしようとする取り組みです。近代の歴史をふり返ると、大谷派が朝鮮半島へと教線を引けた「朝鮮開教」は、一八七六（明治九）年に遡ります。それは、日本が朝鮮（李氏朝鮮／一三九二〜一八九七）と「日朝修好条規」（一八七六年二月二十六日）を結び、釜山を開港した政治的背景のもとで行われました。日本人が三十戸（約三百人）程度しか居留していない釜山で開始した「朝鮮開教」は、日本の朝鮮政策に伴いながら展開されていったのです。その後、一九一〇（明治四十三）年九月三日の「韓国併合」や、

に行われ、『真宗教旨』（一八七六年十二月）を来訪者に贈るといった活動であったことが分かります。『真宗教旨』は、小栗栖香頂（一八三一〜一九〇五）が中国開教を志した際に漢文で執筆したものです。奥村は、小栗栖による中国開教を念頭に置いていたことが分かります。そして、彼の布教理念は、「真俗二諦の旨意を以て布教」するというものでした。

真俗二諦とは、真諦（仏法）と俗諦（天皇の教え）が車の両輪のようにお互いに資け合うと捉える教学の項目です。そもそも近代の大谷派は天皇をはじめとする政府との関係を確実なものへと移行させており、一八七六（明治九）年十一月二十八日には明治天皇から親鸞聖人に対して「見真」の大師号も下賜されました。朝鮮半島では天皇の権威を持ち込むばかりでなく、「韓国皇帝」ら開教地の権威も利用していききました。

## 「韓国併合」と大谷派

第二部は「韓国併合と朝鮮開教」にスポットをあてます。「韓国併合」（一九一〇年八月二十二日）は、近代韓国との外交史を知る上で欠かせない重要なポイントです。日清・日露の両戦争に勝利して東アジアで影響力を持った日本は、ソウルに朝鮮総督府を置いて植民地としての「朝鮮」を確実にしました。大谷派は「韓国併合」を歓迎するとともに、駐留する布教使に対して、朝鮮人を「忠良ノ臣民」になりきらせることを布教の目的とするよう訓示をしました。つまり、植民地経営の安定化に寄与することが「朝鮮開教」に含まれたのです。

「京城」と呼んだソウルの「京城別院」では、かねてから「韓国皇帝」との関係性を強めていました。一八九八（明治三十一年）九月二十三日には「京城別院」の



大谷派の活動拠点の一つ、元山別院



大谷派が設置した女子技芸学校

本堂新築計画に際して「韓国皇帝」と皇太子から多額の寄付を受けたが、「聖躬万歳」（聖なる体が永久に続くように、という意味）の「尊牌」を安置したり、「韓国皇帝」の揮毫による「大韓阿弥陀本願寺」の扁額を掲げるなど、「韓国併合」の直前まで権威を利用したことが分かっています。

「韓国併合」によって政治、外交、軍事、経済、土地、そして教育に至る全てを奪われた朝鮮人でしたが、抵抗もありました。それが「三・一独立運動」です。一九一九（大正八）年三月一日、天道教（民族宗教）、キリスト教、仏教からなる宗教者三十三名の署名による「独立宣言書」がソウルで読み上げられました。この運動は朝鮮半島全土に広がり、三カ月近く継続しました。日本は警察や軍隊を動員して武力による弾圧を行いました。

この動きは大谷派の各別院や開教使にとつても無関係ではありませんでした。本山は、

仏教各宗相携へて邦家統治の大業に資する所あるべし<sup>(3)</sup>

と、日本仏教の各宗派が協力して植民地経営に協力するべきであると訓示しています。そして、朝鮮人を京都の真宗京都中学に留学させて大谷派僧侶とする計画を実行したり、ソウルに女子技芸学校を設置したりといった教育の分野を担いながら幅広く活動しました。こうした資料からは植民地統治に対して疑問視する姿は見られません。

### 「内鮮一体」政策と大谷派

第三部では、「満洲事変」（一九三一年三月十八日）に始まる十五年戦争期の「朝鮮開教」に迫ります。「満洲事変」か

ら日中戦争（一九三七年七月七日）へと戦争が拡大していくと、「朝鮮統治」も厳しさを増していきました。「朝鮮」の独自性を排除し政治的レベルから国民の精神的分野までも同一化しようとする「内鮮一体」の政策が強化され、一九四〇（昭和十五年）年には日本人姓名を名のらせる「創氏改名」がなされました。一九一九（大正八）年七月十八日にソウルに創立した「朝鮮神宮」は、そうした動きを象徴する神社で、神社参拝などを通じて皇民化教育が徹底されていきました。大谷派は「京城別院」に「朝鮮僧侶養成所」を設置して、日本から僧侶を派遣するばかりでなく、「朝鮮」での布教活動を独立したサイクルで行おうとしました。ここを卒業した生徒は「京城」や平壤など、各地の布教所の「朝鮮信徒講習会」の通訳として採用されました。

こうした通常の布教活動に加えて、朝鮮民族宗教を丸ごと末寺とした事実もあります。現在も韓国内で活動している水雲教を、一九三七（昭和十二）年三月に大谷派の末寺「興龍寺」として位置づけたのです。末寺「興龍寺」が頒布した徽章には、次の様に記されています。

卍字というのは、仏は万徳を具備する相である。中央赤色の光明は太陽偏



末寺「興龍寺」が頒布した徽章

照の象で弥陀如来の大悲救済を示したもので、四十八の光明線は即ち四十八願の象である。外廊の八角は八咫鏡の相で、国体觀念の大義を表すなり。吾等、仏子というのは、現当二世に如来の満徳を恵み施こされる為に報徳感謝に精進勇往する表徴なり。<sup>(4)</sup>

### 初公開の寄贈資料

特別展では、「軍人が残した戦争写真」と題し、昨年、名古屋市内の寺院を通じて門信徒から寄贈を受けた『軍人アルバム』を初公開します。このアルバムは、第



「満人家屋の焼却」と記された写真

三師団管下の歩兵隊の一員として出征した軍人（編者）が撮りためた写真が編集されているもので、その写真の横には白いペンで「写真説明」が書き込まれています。保存状態が良く、歴史資料としての価値が高いと判断しました。

分析を通じて明らかになった重要なことは、戦争の最前線に立った者でしか手に入らない写真という点です。撮影時期は、一九三四（昭和九）年から一九三六（昭和十一）年で、主に「満洲国」で撮影されました。延吉や図門、牡丹江、哈爾濱といった地名が見られますが、主に東寧（現在の中国黒竜江省東寧市）で活動したようです。東寧は黒竜江省の南端に位置するロシアとの国境の町として知られています。当時のソ連との間にあった緊張関係の最前線に着任していたのです。「満洲事変」の発端となった柳条湖事件の現場や、日本に抵抗した「匪賊」の家屋を焼き払う写真、それに売春宿を意味する隠語の「ピー屋」と記されたものまであります。このアルバムは、進軍の実態を知る手がかりとなるでしょう。

- (1) 朝鮮半島の時代区分を、李氏朝鮮（二二九二～一八九七）、大韓帝国（一八九七～一九一〇）、そして日本統治時代を「朝鮮」とします。
- (2) 彼の自坊である高德寺（現在の唐津市）の奥村浄信は、一五八五（天正十三）年に釜山で開教したという寺伝もあります。
- (3) 『宗報』第二二三号（宗報発行所 一九一九（大正八）年六月三十日）より。
- (4) 原文は朝鮮語。活字化にあたっては、読みやすさを考慮して適宜句読点や送り仮名を付しました。

※資料の引用は現代用語にあらためました。

# 真宗講集団の葬儀における相互扶助についての補足

研究員 小島 智

## はじめに

筆者は先に、『真宗大谷派名古屋教区教化センター研究報告』第十二集(二〇一九年七月発行)において、尾張地域を具体例としながら、真宗の講組織での葬儀における相互扶助を検討してみた<sup>(1)</sup>。それは、真宗の講組織における多様な役割のごく一部を摘まみとつたに過ぎず、まだまだ内容を明らかにするには至っていないものであったが、現時点での筆者なりの研究成果であった。ただそこでは、当然言及すべき『改邪鈔』第十六条の内容が抜け落ちており、脱稿後その点についてご指摘を頂戴することとなった。この度図らずも、本紙面にて前稿を補足する機会がいただけただけで、本稿では『改邪鈔』第十六条と、葬儀における真宗門徒の相互扶助についての私見を述べてみたいと思う。

\*\*\*

最初に、『改邪鈔』の第十六条を確かめることから始めたい。以下にまず全文を引用する。

一 当流の門人と号する輩、祖師先徳報恩謝徳の集会のみぎりにありて、往生浄土の信心においてはその沙汰におよばず、没後葬礼をもって本とすべきように衆議評定する、いわれ

なき事。

右、聖道門について密教所談の「父母所生身 速証大覚位」(発菩提心論)とらえる場合は、淨利に往詣するも苦域に墮在するも、心の一法なり。全く五蘊所成の肉身をもって凡夫速疾に淨利のうてなにのぼるとは談せず。他宗の性相に異する自宗の廃立、これをもって規とす。しかるに、往生の信心の沙汰をば手がけもせずして、没後喪礼の助成扶持の一段を当流の肝要とするように談合するによりて、祖師の御己証もあらわれず、道俗・男女、往生浄土のみちをもしらず、ただ世間浅近の無常講とかやのように諸人思いなすこと、心うきことなり。かつは、本師聖人の仰せに云わく、「某親鸞朗眼せば、賀茂河にいれて魚にあたうべし」と云々これすなわち、この肉身をかるんじて仏法の信心を本とすべきよしをあらわしますますゆえなり。これをもつておもうに、いよいよ喪葬を一大事とすべきにあらず。もつとも停止すべし。<sup>(2)</sup>

言うまでもなく、『改邪鈔』は本願寺第三代覚如上人が撰述した聖教である。その奥書により建武四(一三三七)年、覚

如上人六十八才時の成立であることが知られ、当時の真宗教団内外に横行した邪義を二十箇条にわたり批判した書である。よって、覚如上人が何を課題としたのかを窺う上で極めて重要な文献であり、すでに諸先学による解説書も上梓されている。直近では、二〇一八年度の真宗大谷派安居次講にて草野顕之氏が講じられており、その講本<sup>(3)</sup>には学ぶべき点が多い。本稿もそちらを参考にしながら執筆しているが、次にその巻末に掲載されている本条の現代語訳も引用しておきたい。

一、浄土真宗の門人と称する人が、親鸞聖人や先達達の報恩謝徳の法会の時に、往生浄土の信心については議論もせず、死後の葬礼を基本とすべきであるというような議論や相談をすることは理由のないこと。

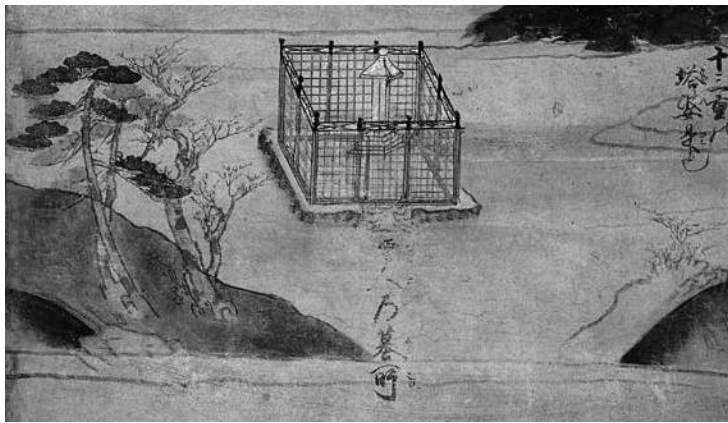
右のことは、聖道門においては、密教でいうところの「父母から生まれたいところの身で、速やかにさとり境界に至る」などというほかには、浄土に往生するのも苦しみの世界に墜ちるのも、心の問題であるという。決して五蘊によってなる肉身で、凡夫がすぐに浄土に往生するとは説かない。他宗の教義とは異なる真宗の一方を廃し他を立てる廃立は、これをもって軌範とする。ところが、往生の信心の論議もしないで、没後葬礼の相互扶助の問題を真宗の肝要であるかのように談合するので、親鸞聖人の「領解もはつきり見えないし、僧俗男女は、往生浄土の道も知らず、ただ世間の浅はかな無常講とかいう

ものように人々が思い込むことは、情けないことである。すでに親鸞聖人はこう仰っている、「私親鸞が目を閉じたならば、賀茂川に入れて魚にあたえよ」と。このことは、この肉身を軽んじて仏法の信心を根本とすべきことをあらわしておられるからである。このことからして思うのは、いよいよ葬送を一大事とすべきではない。当然停止すべきである。<sup>(4)</sup>

\*\*\*

ここで取り上げられるのは真宗の門流の没後葬礼の問題であり、報恩謝徳の法会において信心の話はせずに、「没後葬礼の助成扶持」が肝要だというような話ばかりしていることから、真宗が世間にある「無常講」のように思われていると、覚如上人は批判しているのである。そして宗祖親鸞聖人は、自分が死んだ際は「賀茂河にいれて魚にあたうべし」と遺言されたのだから、真宗においては葬送を一大事としてはならないと続く。

「無常講」とは「念仏講」とも呼ばれ、葬儀と祖霊祭祀に関わる相互扶助的な信仰共同体のことである。十世紀末の比叡山横川での二十五三昧講(会)を源流として、中世以降在地のムラにも組織されるようになったものである<sup>(5)</sup>。よって、真宗の寄合が「無常講」のように思われているということは、葬儀における相互扶助が、すでに真宗の寄合に重要な要素として備わっていたことを指し示しているとも言えよう。しかし、これが覚如上人によって、あるべき姿ではないと批判されているのである。とすれば、註(1)の抽



『善信聖人親鸞伝絵』（三重県津市・専修寺蔵）に描かれる、最初の宗祖墳墓。『聖人乃墓所』との註記がある。〔『真宗重宝聚英』第5巻（同朋舎出版）より〕

稿で見たとような真宗の講組織での葬儀における相互扶助は、そもそもは宗祖の遺言に背くものとして覚如上人から否定されながら、それを無視してさらに盛んになって展開された。一見解釈されることになるであろう。つまり、そこに大きな齟齬が生じ、これをどう考えるのか、という問題が出てくるのである。

\*\*\*

そこで、再度注意深く、第十六条の文面を読んでみたい。すると、草野氏も指摘されるような次のことが見えてこよう<sup>⑥</sup>。すなわち、真宗の法会等の寄合において信心の論議を中心とすべきなのであり、葬礼の相互扶助は二次的なものである。亡骸を重んじるよりも「仏法の信心」を

根本とすべきである、と主張することこそがこの条の目的であるという訳である。決して、葬礼そのものを否定することが主眼ではないと考えられるのである。

そもそも覚如上人が居住する大谷廟堂「ただし元亨元（一二三二）年にはすでに「本願寺」号を名のっている」が、宗祖の墓所にその由来を持つのである。具体的には、弘長二（一二六二）年の宗祖入滅の翌日に、ある意味では宗祖の遺言に反して、京都鳥部野の南、延仁寺にて茶毘に付し、そして鳥部野の北、大谷に埋葬されたその遺骨を、十年後の文永九（一二七二）年、同じく京都吉水の北辺に移して廟堂を建てたことに始まるのである。言うなれば、自分の亡骸は「賀茂川に入れて魚にあたえよ」と宗祖に遺言されても、追慕の念によってそうできなかった子弟・門弟による葬礼が元となって成立したのが大谷廟堂なのである。

また、覚如上人の伝記の一つである『最須敬重絵詞』「上人入滅の翌年、文和元（一二三二）年成立」の第六巻第二十三段には、父・覚恵師の臨終において、その遺骨を、京都の西北、蓮台野芝築地にある祖父・日野広綱の墓の傍らに葬り、延慶二（一三〇九）年の叔父・唯善師との大谷廟堂相統争い終結後は、廟堂に移して宗祖の遺骨とともに崇敬したことも述べられている<sup>⑦</sup>。このような事例を踏まえてみれば、覚如上人が葬礼そのものを否定することは、自己矛盾を露呈することに他ならないとも言えよう。

さらに、これも草野氏が指摘される所ころであるが<sup>⑧</sup>、中世京都においては時

宗の寺が火葬場を運営しており、宗祖が茶毘に付された鳥部野にも時宗寺院の火葬場があったという<sup>⑨</sup>。周知のように覚如上人は『改邪鈔』第三条にて、真宗の門流が裳無衣と黒袈裟を着用することで時宗と同一視されることを厳しく戒めているが<sup>⑩</sup>、この時宗と同一視されることへの懸念が、覚如上人に葬儀での相互扶助を警戒させた面もあると思われるのである。

### 結びにかえて

註(1)の拙稿でも記したように、真宗の講組織での葬儀における相互扶助は、十世紀末からの二十五三昧講（会）に基づく「念仏講」「無常講」を背景として、各門徒団での寄合成立当初から重要な要素として備わっていたと考えられる。とくに教説において、「御同朋・御同行」と同朋意識が強調されたことから、相互扶助



かつて地域共同体で運営されていた火葬場（サンマイ）の一例

的な側面ばかりが表立ってしまふ嫌いも恐らくあったのであろう。故に覚如上人は、真宗における寄合はあくまでも信心の問題が中心であることを再確認する必要があった。その為に、あえて宗祖の遺言を示したのではなからうか。繰り返すものはないと言うべきなのである。そしてまた、宗祖に亡骸は「賀茂川に入れよ」と言い残されても、それに従えずに廟堂を建立した子弟・門弟の宗祖追慕の念が、真宗の教えを伝えてきたという歴史的事実も忘れてはならないであろう。それは真宗門徒の「寄り合う」という行為を推進し、互いの信心を深めてきた重要な要因でもあったのである。

- (1) 拙稿「真宗講集団の葬儀における相互扶助―尾張地域を例として―」
- (2) 『真宗聖典』（一九七八年、東本願寺出版部）六八九、九〇頁。
- (3) 草野顕之『二〇一八年安居次講「改邪鈔」史考』（二〇一八年、東本願寺出版）。
- (4) 註(3)書、一二六、七頁。
- (5) 『国史大辞典』第十一卷（一九九〇年、吉川弘文館）三三九頁、『民俗小事典 死と葬送』（二〇〇五年、吉川弘文館）七七頁参照。これに関しては註(1)拙稿でも少し触れておいたので、併せて参照いただきたい。
- (6) 註(3)書、第二章第六節参照。
- (7) 『真宗史料集成』第一卷（一九八三年、同朋舎出版）九六八〜七二頁。また、『増補改訂本願寺史』第一卷（二〇一〇年、本願寺出版社）第二章第四節参照。
- (8) 註(6)に同じ。
- (9) 勝田至編著『日本葬制史』（二〇一二年、吉川弘文館）第三章第二節参照。
- (10) 註(3)書、第二章第三節参照。

## 新型コロナウイルス感染症に伴う 教化センター主催事業の開催 見送りのお知らせ

教化センターは、本年3月に開催を予定しておりました

- ・聖典研修「『教行信証』撰述の願い」第5回(3月9日)
- ・平和展特別学習会「韓国仏教の現在」(3月14日)
- ・第31回平和展「真宗大谷派の海外侵出-朝鮮開教-」  
(3月17日~23日)

つきまして、**3月における開催を見送りとさせていただきます**ので、お知らせいたします。

この度の決定は、昨今の新型コロナウイルス感染症による影響の拡大および終息の見通しが立たない現状においては、会場内における来場者の安全を確保することが困難であるという判断によるものです。ご来場を予定して下さっていた方々におかれましては、この場を借りて深くお詫び申し上げますとともに、何卒ご理解賜りますようお願いいたします。

開催を見送った上記の事業につきましては、本年6月末までに代替日を設定し開催することを目指して協議ならびに調整を重ねてまいります。**今後の方向性が決まり次第、HP「お東ネット」等でも改めてご案内させていただきます。**

なお、名古屋教区・教区教化センター・名古屋別院主催、もしくは名古屋別院を会場に開催予定でありました**右記の事業についても、同様の理由から中止または延期の措置が取られましたこと**を、併せてご報告申し上げます。

## 中止または延期の措置が取られた主な事業

### 【名古屋教区・教区教化センター 主催】

- ・3月3日(火) 伝道スタッフ養成講座
- ・3月5日(木) 教区解放運動研修
- ・3月9日(月) 聖典研修
- ・3月14日(土) 平和展特別学習会
- ・3月17日(火) 第31回平和展(～23日)
- ・3月26日(木) 解放運動推進要員研修
- ・3月30日(月) 得度研修

### 【名古屋別院 主催】

- ・2月29日(土) こどもカフェ
- ・3月5日(木) おてらいふ(～6日)
- ・3月8日(日) 信道講座
- ・3月10日(火) 門徒声明
- ・3月12日(木) 縁日「一如さん」
- ・3月14日(土) 老いと病のための心の相談室 公開講演会
- ・3月15日(日) 子ども自然教室
- ・3月18日(水) 災害ネットワーク研修
- ・3月21日(土) 人生講座
- ・3月24日(火) 別院奉仕研修
- ・3月25日(水) 真宗門徒講座
- ・3月27日(金) 門徒声明
- ・定例法話(3月5日～28日)
- ・巡回法話(3月未まで)

\*本堂における法要は平常通り勤務

### 【名古屋別院 会場(関係団体主催)】

- ・2月28日(金) 東別院てづくり朝市
- ・3月11日(水) 3.11わすれな鐘 チャリティーライブ
- ・3月12日(木) ミーツオーガニックマーケット
- ・3月14日(土) 第22組坊守会 公開講座
- ・3月28日(土) てづくり緑市/寺フェス「Buddha GIRI」

\*2020年3月4日 現在

## INFORMATION

### 教化センター日報 ■2019年12月～2020年2月

- 12月4日 研究業務「自死者追悼法要」後援
- 11日 研修業務「第13期研究生 聖典講読」⑤  
研究業務「平和展」学習会
- 13日～18日 名古屋別院報恩講
- 24日 研究業務「平和展」学習会

- 1月20日 研修業務「聖典研修」④(一楽真氏)
- 23日 研究業務「自死者追悼法要」反省会
- 27日 図書整理(～2月7日)  
研修業務「第13期研究生 報恩講」
- 2月6日 研修業務「第13期研究生 聖典講読」⑥
- 10日 教務所・教化センター合同報恩講
- 17日 教務所・教化センター職員研修(～18日)
- 21日 研修業務「第13期研究生 課題学習」③
- 27日 研究業務「平和展」学習会

## 新型コロナウイルス感染症に伴う 教化センターのご利用について(お願い)

本紙発行の3月25日現在、教化センターは通常通り開館しております。しかしながら、昨今の新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う物流の影響により、ご来館くださいました皆様に感染症予防としてお使いいただくための**手指用の消毒液を設置することができない状態が続いております。**

大変申し訳ありませんが、教化センターをご利用の際は、マスク・手洗いがいなど、**各自において新型コロナウイルス感染症の予防に努めてくださいますよう、お願い申し上げます。**

### 《雑感》

新型コロナウイルス感染症による影響が各地へと拡大し続けている。終息の兆しは一向に見えず、本山や各教区・別院における講座や行催事についても、次々と中止や延期の措置が取られている。

このような状況の中、とりわけ目を引いてしまうのがネット上の反応だ。真偽も定かではない無数の情報が拡散し、罹患者や医療関係者などへの罵詈雑言がありとあらゆる角度から飛び交っている。

ウイルスという、目に見えないからこそ恐怖を抱き、少しでも自分から遠ざけようとする、その心理自体は理解できる。また、終息の見通しが立たない現状では、不安に駆られ衛生品や食料品などの買い占めに走る人が出てくるのも、ある意味では仕方のないことなのかもしれない。

しかし、今の日本における状況が、9年前の東日本大震災当初とどこか重なって見えてしまうのは、私だけなのだろうか…

(て)

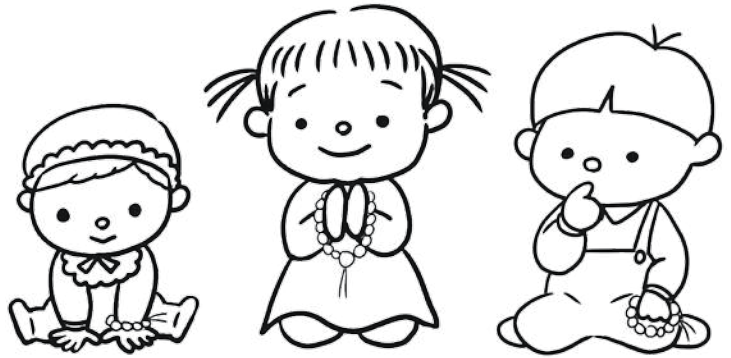
### ■教化センター

〈開館〉月～金曜日 10:00～21:00  
(土曜日・日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)  
〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間  
～お気軽にご来館ください～



イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。



• データを希望される場合はお問い合わせください。  
• 差支えなければ、イラストを使用された場合、教化センターまでお知らせいただくとともに、イラストを使用した印刷物などお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。  
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。